10/11/2018

＊キリスト教学講読Ｂ＊＊＊＊　　S.　Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む

本講読は、キリスト教思想における基礎文献をじっくり読むことを通して、キリスト教思想研究とその方法について学ぶことを目的としている。また、この講読は、キリスト教学専修に所属の学部生の卒論演習を兼ねており、研究発表の機会を設けることが予定されている。 今年度後期は、H. Richard Niebuhr, *The Responsible Self. An Essay in Christian Moral Philosophy*, Harper & Row, 1963. に所収の諸論文を読む。

Ｂ．テキスト

H. Richard Niebuhr, *The Responsible Self. An Essay in Christian Moral Philosophy*, Harper & Row, 1963.

Ｃ．成績などについて

・平常点による。

Ｄ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．演習参加者の役割

(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　問題点・補足事項。

(2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。

２．10/11：テキストの配布、担当の決定、ニーバーの思想解説。

10/18 ～：テキストの最初から、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

10/4, 11。18, 25, 11/1, 8, 15, 29, 12/6, 13, 20, 27。　1/10, 17

＜Ｈ・Ｒ・ニーバー(1894-1962)＞（『岩波キリスト教辞典』から、金子啓一）

・北米の神学者、Ｒ・ニーバーの弟、Ｒ・Ｒ・ニーバーの父。

・トレルチ＋バルト

・イェール大学神学部で 1924 年、博士号取得。

・31 年から、イェール大学でキリスト教倫理を担当。

・『アメリカにおける神の国』(37)、『啓示の意味』(41)、『キリストと文化』(51) など。

・「歴史に顕現する超越神と出会う人間が、終末論的共同体として教会を形成しつつ、歴史と文化を変革する応答的実存であることを強調する組織神学、応答と責任の倫理学を展開」

・Ｇ・Ｄ・カウフマンら多数の神学者が輩出。

＜導入講義１＞

・芦名定道「Ｈ・リチャード・ニーバーと信仰論の射程」（大阪市立大学文学部紀要『人文研究』第 45 巻第 3 分冊、1993 年、107-126 頁）

コピー配布

＜導入講義２＞

『責任を負う自己』

ジェームズ・Ｍ・カスタフソン「解説的序文」（Introduction. pp.6-41）

１．キリスト教特有の神学的道徳ではなく、キリスト教以外の共有された人間理解をふま

えた道徳という意味で、道徳哲学。
・「ニーバーの倫理思想および教授生活における全体的かつ持続的主題」
・「道徳生活についての知識を神学的教義から引き出す道徳神学者」としてよりも、「キリスト教的道徳生活についての哲学者」。
・「体系的な思想へのアプローチ」「神への応答」「体系的倫理学」
「目的論的・義務論的・責任論的倫理としての類型論」
・「キリスト者の共同体が思考によってその道徳的行為を批判する努力」、「人間の道徳性についての普遍的現象およびそれについての反省」
「キリスト教倫理についてのより包括的体系的な思想の他の観点」

２．関係論的価値論
・「キリスト教倫理についての類型論」「関係」
　「神に対する人間、および神の前での人間と人間」
　「神との関係においてはじめて価値は価値となる」
・G・H・ミード、ジョナサン・エドワーズ、「アメリカ的観点」

３．キリスト教的人間理解としての人間の有限性。
　有限性は限界づけであるが、同時に、相対的な地平で積極的な構築を行うことの肯定でもある。
・「バルト」「ボンヘッファー」
「知的企てとしての倫理学から何が期待でき、何が規定出来ないか」「即座の実践性をもった便覧ではない」
・「エートスを分析し、共同体の道徳生活の根底と基本的な性格を明示すること」

４．神との関係における人間。応答する人間、責任を負う人間。という人間類型。
　　価値論の場合。
・「キリスト教倫理はキリスト教的信仰から始まる」、「キリスト者の独自性とは、共同体が告白する神の歴史的啓示の独自性のこと」
・「自己知識を助ける」、「倫理学とは、神についてのわれわれの知識との関係における、われわれ自身についての知識である。」
「自己を知るということは責任を負う生活にとって本質的なもの」
「全体的統一性を達成しようと努力する人々を助ける」

５．キリスト教との関係。特に、聖書の位置・権威をどのように理解するか。
・「キリスト教倫理における聖書の権威について」
「人間および道徳社会についての知識は、哲学だけからだけでなく、心理学や社会科学からも得られる、というニーバーの寛容性」
・「人間の責任性の本性の複雑さ」
・「キリスト者にとって聖書というものは命令的な権威」「問題ある権威」
「聖書に絶対的な権威を帰すことはできない。仲保的派生的な権威」、「権威の多元性」
「権威というものは排他的ではなくしかもユニークであることはできる」、「聖書の権威は、たしかに理性の権威とは違っている」

・「聖書はいつも誤りやすい解説者の前に立っている」
・教育的権威
・確証的権威、「判断と行為のための確証の法廷」
・ユニークな一つの権威、信仰の記録、唯一者の歴史的な啓示を物語っている。